ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文 北原モコットゥナシ・瀧口夕美　絵 小笠原小夜

イペアンロー！（いただきます）

今回は、スサム（シシャモ）をしょうかいします。「ヤナギ（スス）の葉（ハム）」という意味で、細長い葉の形に似ているところからついたのでしょう。日本語の「シシャモ」はアイヌ語からきています。

スサムは秋の終わり、ちらちら雪が降るころに、産卵のため海から川へ上ります。スサムが上るのは八雲の遊楽部川、胆振の鵡川、日高の沙流川、十勝川、釧路川など、北海道の太平洋側の川だけです。スーパーで「カラフトシシャモ」などの名で売られているのは、別の種類の魚です。

私の母が育った十勝川沿いの地域では、産卵の時期、大人たちは胴長というくつとズボンが合わさったようなゴム製の服を身につけて川に入り、タモあみでスサムをすくっては、川にうかべた小ぶねにどっさり入れて、岸に運んだそうです。川を上るたくさんのスサムは、人々に冬のおとずれを知らせ、また、カムイ（自然や動物たち）があたえためぐみに感謝の気持ちを起こさせたでしょう。

スサムにまつわる言い伝えはいくつかあります。私の高祖父（おじいさんのおじいさん）は、こんなお話を残しました。

一昔、食べものがとれず、うえ死にする人さえ出たとき、コタン（村）のリーダーの夢でカムイがお告げをしました。次の日の夕方、お告げのとおり、急ごしらえのタモを手に手に川岸に出ると、ヤナギの葉に似た魚がたくさん集まっていました。人々はその魚をありがたく食べ、以来、来る年も来る年も、山菜が採れる春が来るまで、うえることなく暮らすことができました。

「スサム」シシャモ　冬を知らせる魚

カンピソシ(木)人物伝

砂沢クラ

砂沢クラは、1897年（明治30年）、旭川の近文コタンの村長の孫として生まれました。父はかりの名人で、クマをとっては村の人にふるまいました。教育熱心で、かしこいクラを学校に通わせ、かわいがって育てました。

11歳になる年、土別の農家にクマが出て悪さをするというので、クラの父が退治をたのまれましたが、逆にクマに殺されてしまいます。何不自由なく育ててくれた父が亡くなり、クラは女学校に行くことを夢見ながら、ニシン場や鉄道の工事現場などで働きました。

20歳になる年、雨竜の伏古コタンに住む砂沢友太郎と結婚し、畑仕事を始めます。友太郎もまた、かりの名人で、おいのりやユカラ（英雄物語）も立派に行い、伝統や習慣を大事にしていました。しかし、暮らしはきびしく、洪水や冷害、家族の病気、人間関係になやみ、一家は北海道内をあちこち移り住んで、観光業や牧場、炭鉱などで働きます。

ク　スクップ　オルシペ
私の一代の話

砂沢クラ著

この本を読むと、アイヌ民族とカムイ（自然や動物たち）が、ふだんの暮らしのなかでどのようにつながっているのか、よくわかります。たとえば、大事なときには夢に死者やカムイが現れて、危険を知らせます。また、不思議なことが起こるとヌプルクル（うらないをする人）に相談したり、トゥス（予言）の能力を持つ人に助言を求めたりしました。そして、子どもたちが聞いて育つ昔話には、困ったことをきりぬける知恵がこめられていました。

夫を亡くしてから、クラは本格的にアイヌ文化の伝承に取り組み、池上二良や浅井亨らのアイヌ語の研究を手伝いました。北海道文化財保護功労者として表彰され、1990年に93歳で亡くなりました。（1983年、北海道新聞社／1990年、福武文庫＝絶版）

ニュースフムフム

「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

「らしさ」は社会とともに
昔からあったジェンダーレス

みなさん、ゲームは好きですか？　ゲームの中では、プレーヤーが自分の分身となるキャラクターの性別を自由に選び、好きな服装をさせて遊ぶことがよくあります。現実でも「女らしさ」「男らしさ」からはなれ、自分のしっくりくる方を選ぶ「ジェンダーレス」な装いが少しずつ広がっていますね。

生まれた性別とはちがう性別の服装や髪形などにすることを「異性装」と言います。東京の渋谷区立松濤美術館で開催中の展覧会「装いの力―異性装の日本史」（30日まで）は、和人文化をさかのぼって、異性装の歴史をしょうかいしています。

伝統芸能の歌舞伎は、役者がみんな男性なのを知っていますか。女性の役も、女性の化粧をし女性の着物を着た男性が演じます。400年前、歌舞伎が生まれたころは、逆に全て女性が演じる「女歌舞伎」もありました。

もっと昔、神話の中では、男装して戦った神功皇后や、女装して戦ったヤマトタケルが活躍します。ヤマトタケルの話から、ユカラ（英雄物語）の一つを思い出します。旭川に伝わるユカラには、主人公の少年ポイヤンペが敵の城にのりこむときに、女性の着物を着て、相手を油断させる話があります。

また、日高の平取町の昔話には、かりをする女性が登場します。この女性は、着物のそでから両うでをぬいた、イイェマカアトゥサレ（もろはだぬぎ）の姿でかりをします。

「女性らしさ」も時代や文化によって変わるよ

和人
昔は立てひざだったけど今は正座

韓国人
昔も今も立てひざが正式

アイヌ民族
昔は立てひざだったけど今は正座

これも、動きやすいように、男性のような姿になった、と言えそうです（女性はふつう、はだを人に見せません）。

昔の和人文化では男性も化粧をしていましたが、明治時代になると、男女をはっきり分けるヨーロッパ風の考え方をまねるようになりました。こうして見ると、ジェンダーレスな文化は昔からあったのですね。

きょうのことば

●ユカラ

アイヌ民族が伝えてきた、長い長い英雄の物語です。主に北海道の西の方ではユカラ、東の方ではサコロペ、樺太（サハリン）ではハウキと言います。よく知られた話では、ポンヤンペやポイヤウンペ、オタストゥンクルと呼ばれる幼い少年が登場し、大人や神様たちを相手に大迫力のバトルをします。

今回しょうかいした話では、あちこちの村のつわものがたくさん集まって酒を飲みながら、みんなでポンヤンペ一人をおそう相談をします。それを知ったポンヤンペは、反対に自分からのりこんでやっつけます。相手の城に飛びこむとき、女性の着物を着て油断させたのでした。

●女らしさ／男らしさ

「ジェンダーレス」のジェンダーとは、社会の中でつくられた「女らしさ／男らしさ」といった考え方のことです。

女らしさや男らしさは、生まれつき持っているような気がします。実はそれは、まわりの人から「こうした方が女／男らしいよ」と教えられて、いつの間にか身につくものなのです。

かりをしていたころのアイヌ文化では、かりは男性がすること、山菜採りと畑仕事、家事は女性がすることとされました。

ジェンダーの考え方は、時代によっても変わります。今では女性が身につけるハイヒールやスカートも、男らしいと考えられていた時代があるんですよ。